

『皆の団地（カイノウチ）』

『皆の団地（カイノウチ）』

上坂京子
こうさかきょうこ

『皆の団地（カイノウチ）』

【登場人物】

望月真紀（30）	三〇二号室住人 カメラマン兼コンビニ店員
沖ナオミ（34）	二〇二号室住人 元女優 ダンス講師 兼振付師
桜田千代（70）	一〇五号室住人 元自治会副会長
桜田智子（33）	千代の娘 病院勤務
広瀬美香（28）	フードコーディネーター

【場】

高度成長期に建てられた、とある集合住宅「花森ひかり団地」は五階建、エレベーターなしという造り。老朽化によって転居者が相次ぎ、高齢独居者たちの孤立や、自治体としての機能低下が問題視されるようになっていた。

打開策として都市計画機構と民間業者が組むことになり団地再編案を企画（*通称サステイナブルプラン）空き部屋が多い棟から順にリノベーション工事を施し、働き世代、子育て世代を呼び込もうとしていた。

主となる舞台は、サステイナブルプラン・第五エリア。三〇二号室。望月真紀の部屋。（旧タイプの部屋）カメラマンだった祖父望月聡が遺した作業場兼住宅。

下手に玄関、トイレ、浴室（暗室として使用）

手前に作業場。ロールカーテン、ストロボ、姿見、レフ板、カメラ。

舞台中央にキッチン。扇風機。長方形の台（座卓にもベッドにもなる大きさ）

上手、和室。腰高窓（ロールカーテン）

その他、エリア内にある空き部屋のベランダ。

*団地再生案の名称は、「サステイナビリテイ」今ある環境を次世代に繋げる可能性から取ったもの。

【時】

主に二〇一七年八月から二〇一八年四月まで。記憶の断片として、一九九七年冬、二〇〇五年夏。

『皆の団地（カイノウチ）』

（プロローグ）

一九九七年。冬。

真紀 ただいま、千代さん。

千代 おかえり、真紀ちゃん。

美香 ただいま。

千代 あれ、美香ちゃんも？ 今日ってお母さん、

美香 パート。

千代 そう。じゃ、戻ってきはるまで、みんなでここにお

真紀 みんなって？

千代 ほら、そこ。

真紀 わ、長瀬。なんでここで寝てるん？

千代 お腹痛いんやって。サトル君のお母ちゃん、まだ病

院やから。

真紀 アホやなー、長瀬。

美香 アホやなー。

千代 誰、汚い言葉。

真紀 だって、プリン。私の分。お誕生会の時の。

美香 私のゼリーも。

真紀 エクレアも。

千代 まあ。

真紀 バチや。

美香 バチや。

千代 わかるけど。あかんで、人が弱ってる時に。

間。

千代 智子は？ 一緒やなかったん？

真紀 知らん。

美香 知らん。

千代 そう。

美香、鼻をひくつかせ。

美香 なんか、いい匂いする。

千代 わかった？ 今日のおやつはおぜんざい。

真紀・美香 いえーい。

真紀 食べよ、ぜんざい。

美香 食べよ、食べよ。

真紀 でも、長瀬は食べられなーい。

千代 ほーら、おやつはまだ。みんな揃ってから。

真紀・美香 えーっ。

千代 さっ、手洗って、うがいして、宿題しながら待っ

てよ。

美香 私、手洗って、うがいして、顔も洗う。

真紀 ええねん顔は、洗わんでも。

美香 だって、

真紀 だって、なに？

美香 「汚れてるで」って。

真紀 誰に言われたん？

美香 ……。

真紀 お姉ちゃんに言うてみ。怒らへんから。

美香 うそやん。真紀ちゃん、お姉ちゃんとかやう。

真紀 ええから、言うてみ。

美香 いやや。

千代 美香ちゃん、そんな相手にしたらあかん。

真紀 ちえ。

千代（真紀に）真紀ちゃんのことやないがな。（美香に）今

度そんなことあったら私に言い。ちゃんと言うてきか

せたるさかいに。

美香 うん。

真紀 うちにも言い。そいつの頬つぺた思いつきりつねっ

たる。

美香 真紀ちゃんには言わへん。

真紀 なんで？

美香 けんかするから。

千代 真紀ちゃん、喧嘩はダメよ。

真紀 ちえ。

千代 ちえ、やないの。誰とでも、仲良くせな。

間。

真紀 あーあ、智ちゃん、早よ帰らへんかな。

美香 そしたら、ぜんざい食べられるのになー。

真紀 そんなことぜんぜん言うてないし。

美香 ぜんぜん、言うたしー。

真紀 なにそれ、変なのー。

美香 変なのーとか言うて、変なのー。

溶暗。

くすくすと笑い声。

溶明。

二〇一七年十月。夕方。

ベランダの柵に掴まり、目の前の光景をぼんやり

見ている桜田千代（千代）

千代 あ。

雨が降ってきた。最初はぽつぽつ、やがて叩きつ

けるような大雨に。

千代

地

も。砂みたいな色になってもうた。海も、空も、ここ（団

千代、叫ぶ。

千代 おーい、智子。早よ、帰っておいで。

目しているのは、茫漠とした記憶の海。

風、雨の音。

すべては、時間経過とともに曖昧になっていく。

(一)

二〇〇五年。夏。夕暮れ時。ツクツクボウシが鳴

いている。

三〇二号室。（望月家）

玄関。ドアノブを回す音。

望月真紀（真紀）が帰ってきた。
Tシャツに短パン、つつかけ姿。手には洗面器。
タオルをターバンのように巻いている。

真紀 ただいま。

真紀、うつむき、靴を脱ぐ。

と、座卓前に木箱を持った千代が座っている。

真紀 あれ？ 千代さん。

千代 おかえり真紀ちゃん、お邪魔してます。

真紀 いらっしやい。聡じいは？

千代 「煙草切らした」言うて。

真紀 ふーん。

真紀、千代に近づく。

真紀 パーマ？

千代、急に華やいで、

千代 わかるう？

真紀 どこで？

千代 スミレ美容室。リニューアルオープンで割引券もろ

て。

真紀 いいわ、その髪。

千代 嘘ーん。ほんまあ。

真紀 うん。よう似合っってはる。

千代 やっぱ若い子は違うな。それに比べてあんたのお
じいさん。一緒におつてもなーんも。毎回毎回、精がな
いわ。

真紀 わかる。

真紀、自分の頭を指さす。

真紀 この前なんか、この頭見て、「蟻みたいやな」って。

ターバンとかやったらまだわかるけど。

千代 言うにしても、言わんにしてもな。

真紀 なあ。

千代、真紀、笑う。

真紀 自治会？ 今日もなん？

千代 そうやがな。

真紀 盆踊り大会やもんな、もうすぐ。

千代 決め事ばかりで、かなわんわあ。

真紀、木箱を見る。

真紀 何なん、その箱？

千代 目安箱。団地内で気づいたこと、お困りごとがあつ

たらお知らせくださいってやつ。

真紀 なーんや。文句言いのための箱。

千代 文句やのうてご意見な。

真紀 おるん？ そんなん書く人。

千代 おるよ、そりや。

『皆の団地（カイノウチ）』

真紀 どうんな？
千代 「花壇のお花はチューリップにして下さい」とか。
きらきらオメメの女の子のイラスト付きで。

真紀、笑う。

真紀 それ、明らかに子供。
千代 ええやん、可愛いやん。
真紀 今、夏やし、時期とうに過ぎてもうてるし。
千代 来年の春に向けてな。
真紀 気の長い話やなあ。

間。

千代 なあ。
真紀 ん？
千代 あんたんとこの高校、最近何かおかしいことない？
真紀 おかしいこと？
千代 これ、見て。

真紀、差し出された投書を読む。

真紀 こんにちは嘘、嘘ぼつかし。
千代 やんな。

千代、真紀から投書を受け取り、溜息。

千代 ほんま、次から次と。

真紀 え。
千代 大変やってん、昨日の朝。カラスいっぱい群がって。
真紀 また、ゴミ集積所？

千代 ううん。門のどこ。

真紀 門？

千代 ハクビシン。

真紀 ハクビシンて？

千代 タヌキとアライグマとイタチを掛け合わせたみたい
な。

真紀 それが？

千代 置いてあった。

真紀 どこに？

千代 だから門。団地の門の上に死骸。カラスがわーって
群がって、ぐちゃぐちゃやし、べつとりやし、ぞわ
つとなつた。

真紀 何それ、気色悪い。

千代 そう、めっちゃ気色悪かってん。悲鳴やら何やら、
色んな人が「何とかして」言うてうちに。あんたのおじ
いさん、いや、会長さん出張でおらんかったから。

真紀 ああ。

千代 カラスのせいで、もう、えらい目に遭うた。

真紀、訝しげに、

真紀 カラス？ ほんまに？

千代 そうや、環境局の人もそう言うてはったし。

真紀 思い出してもうた。ほら、あれ。

千代 え？ ああ、あれなあ。

千代、顔をしかめ、

千代 最近はもうニュース観るのも怖いくらい。気いつけましようねえって、会長さんと。

真紀 どうやって？ 際限なくない、模倣犯とか。

千代、再び溜息。

千代 もう、何がなんやら。

真紀 怖いな。

千代 怖い。そこいらじゅう綻びだらけ。

真紀、言葉の意味が掴めないまま、千代を見る。

千代 十年過ぎるとなあ。

真紀 ……。

千代 一個のおにぎり分け合って、命繋いできた頃のこと

思ったら、今は、

真紀 今は？

千代 わからん。

千代、手にした投書に目を落とし、

千代 わからんけど、こないな投書は見過ぎせませんな。自治会の人間として学校にも一報入れとかんと。

間。

千代 真紀ちゃんは？ 今日も銭湯か？

真紀 うん。

真紀、暗室と化した風呂場を覗く。

真紀 お風呂場、聴じいに占領されたままやから。

真紀、ふてくされた様子で、

真紀 て、言うたら、「進駐軍と一緒にすな」やって。「占領」言うた返しがそれ。そんな昔の言い方、聴じいだけやねんて。

千代 真紀ちゃんからしたら、そりや古いわなあ。

真紀、扇風機を抱え込んで風に当たる。

千代 言うてくれたら、お風呂ぐらいいつでも使わせてあげるのに。

真紀 ええねん。夏やし、銭湯気持ちいいし。

千代 そうかあ。

真紀、ずりずりと座ったままの姿勢をキープしながら移動。座卓の横で腹筋を始める。

真紀 一、二、

千代 腹筋？

真紀 三、四、
千代 何で？

真紀 ノルマ。

千代 お風呂上りに？

真紀 忘れとった、最低でも百回はしとかんと。

真紀、黙々と腹筋。

千代 そこまでして続けんでも、

真紀 いざって時に備えて鍛えとかんと。

千代 そうやろうけど。

真紀 やらんとなまるし、気持ち悪いし。

千代 汗かくで。

真紀 遅し、もうかいてもうてる。

キヤーっつと一声。鋭く響く女の悲鳴に、
若い男の怒号が重なる。

千代 何。

真紀 下。

真紀、慌てて起きあがり、ベランダから外を見る。
千代も立ち上がり、真紀の後ろに。

真紀 なんで？ ミカリンと長瀬。ゆうと、もう一人。あ、
こっち見た。

真紀、下に向かって叫ぶ。

真紀 どうしたん？

間

真紀 えー、何？

真紀、叫ぶ。（マイム）

下と何度かやりとり。

驚いて。

真紀 あかん、救急車呼ばな。いや、パトカー。違う、や
っぱり救急車。

真紀、対応のため部屋の中を動き回る。

鳴り響くサイレン。

音が止む。

真紀、慌てて部屋を出て行く。

再びサイレンが鳴り、やがて遠のいていく。

二〇一七年一〇月。

激しい雨音。

千代、前方を見つめたまま、突っ立っている。

稲光。少し遅れてドーンという音。

千代、目を見開き、頭を抱えてしゃがみ込む。

暗転。

(二)

二〇一七年。八月。夕方。
ドドドドと掘削の音。

蟬の声。

三〇二号室。（望月真紀の部屋）

和室にて、カメラを構える真紀。

向いには、ガウン姿の沖ナオミ（ナオミ）が立っている。

ラジオから、テロ事件の続報が流れている。

真紀 本当がいいんですか、ナオミさん。こんな所で？
ナオミ うん。スタジオ、スタジオしてない方が。

真紀、窓の方向を指さし、

真紀 じゃ、そこ。

ナオミ ここ？

真紀 座ってもらってもいいですか？

ナオミ こう？

ナオミ、窓下の台に腰かける。

真紀、カメラの位置を変えながら、

真紀 とりあえず、それで。

工事の音。

ナオミ 終わらないね！

真紀 終わりませんね！

ナオミ 自分家の工事が済んだとたん、うるさいって思うのはエゴかしら。

真紀 マシですけどね。

ナオミ え。

真紀 一人の時は窓開けてますから、ほら、

真紀、窓を開ける。

けたたましい音。

窓を閉める。

ナオミ 信じらんない。

真紀、笑う。

真紀 慣れですよ、慣れ。こういうものだと思ってしまうば、さほど。

真紀、ナオミを気遣う。

真紀 暑かったら、エアコン調節するんで言って下さいね。

ナオミ 大丈夫。あ、

真紀 え？

ナオミ 音。さつきよりマシ。

真紀 でしょ。

ナオミ、笑う。
真紀、ラジオを指さす。

真紀 切ります？

ナオミ うん。なんか曲ある？ 適当でいいから。

真紀 演歌？ それとも、Jポップ？

ナオミ え？ 何？ ぜんぜん聞こえないんだけど。

真紀、笑う。カメラを脇に置き、屈みこんでCD操作。

真紀 こんなところですかね。

曲が流れる。
真紀、カメラを構える。

ナオミ ねえ、いつ脱ぐの？

真紀 まずは大まかに構図決めときたいんで。あ、下脱いでもらってますよね、痕つくことややこしいんで。

ナオミ ややこしい？

真紀 下着の痕。まあ、デジタル処理したら簡単に消せませうけど。

ナオミ それは嫌。画面上だけでどうこうするのは。

真紀 ですよねー。言うと思った。

ナオミ どうして？

真紀 ナチュラル派だから。

ナオミ ナチュラル？ 私が？

真紀、ファインダーを覗きながら、

真紀 ナチュラルですよ。それでいてお綺麗です。ナオミさんは。

ナオミ、髪を掻きあげながら、

ナオミ ね、気づかない？

ナオミ、目尻を指さし、

ナオミ ほら、ここ。ボトックス。

真紀、カメラを下す。

ナオミ 黒子除去したついでに。ちゅーっと。定期メンテナンスで。

ナオミ、注射器を動かすフリ。

真紀 ちゅーっ？

間。

ナオミ 真紀ちゃん。

真紀 はい。

ナオミ、プツと吹き出し、

ナオミ 何、その顔。嘘よ、嘘。ボトックスなんて。やったのは、黒子除去だけ。泪黒子だからって、占いで。
真紀 泪黒子？
ナオミ 五年前の年明け。何とかの母だか、婆々だかいいう占い師が、運氣上げたきや取りなさいって。

ナオミ、笑いながら、

ナオミ でね、その一か月後に乳癌が見つかった。

真紀 そんな。

ナオミ 効果あったんだか、無かったんだか。

真紀 ……。

ナオミ 温存手術ですんだから、まだ、あれだけど。

真紀 ナオミさん、セカンドオペニオン受けた方がいいですよ、絶対。

ナオミ ありがとう。そのつもり。でも、今度ばかりはね、真紀 ……。

ナオミ だから、ね。できるだけ綺麗に撮って。

ナオミ、台の上で横座りする。

ナオミ こんな感じで、どうかしら？

真紀、悲し気な顔。

ナオミ ほらあ。そんな顔しないで。今は保険でやれるのよ、再建手術も。

真紀 再建手術？

ナオミ まっ、切除したらって話だけど。

真紀 そうですよね、まだ。

ナオミ そんなことより、ポーズ見て、ポーズ。

真紀、カメラを構える。

真紀 後ろ振り返ってみてもらえます？

ナオミ、振り返りついでに床に目を落とし、唐突に、

ナオミ あー、失敗。

真紀 失敗？

ナオミ 一部だけでも畳、残すんだった。

真紀 何で今？

ナオミ こっちの方が断然落ち着くなあって。

真紀 せつかくリノベーションしたのに、そんなもんですか。

ナオミ 畳もだけど、このレトロ感がいいのよね。思い出しちゃう。「団地妻」シリーズとか。

真紀 え、ナオミさんそっち系の仕事も？

ナオミ 違うわよ。観たことあるって話。ご一緒した先輩絡みで、

真紀 なあんだ。

ナオミ こう見えて清純派。

真紀 出てたんですもんね、朝ドラ。
ナオミ まあね。

真紀 あ、ナオミさん、もうちよつとこう反って、少し斜

めに。背中のラインも拾いたいんで。

ナオミ こう？

真紀 もうちよつと。あー、そうそう。

間。

ナオミ 写るかしら？

真紀 え。

ナオミ、左胸を押さえ、

ナオミ 傷。前の、手術ん時の。

真紀 角度変えて撮るんで大丈夫ですよ。

ナオミ、首を振り、

ナオミ じゃなくて。

真紀 え。

ナオミ 撮って欲しいの、全部。これが私、って思えるよ
うに。

と、窓ガラスを突き抜け屈折したオレンジ色の光
が部屋に差し込む。

ナオミ、反ったままの姿勢でスクリーンの隙間に
指を差し入れ、外を眺める。

ナオミ 綺麗ねー。夕焼け。

真紀 ほんと。

ナオミ 自分から、モノクロ写真を希望しといてなんだけ

ど。ここまで綺麗だと、色、写んないのは残念だね。

真紀 大丈夫。ちゃんとおさめますよ。

ナオミ え。

真紀 色に惑わされない真実を、ね。

ナオミ 真実ねえ。

真紀 じゃ、そろそろガウン脱ぎましようか。

溶暗。

(三)

二〇一七年八月。三〇二号室。

ナオミを撮影した一週間後。午後。

花森ひかり団地は、相変わらず工事中。

廃材を積むためやって来た大型トラックのエンジ

ン音。ガリガリとコンクリーの壁を引っ掻くシ

ヨベルカー。現場で働く作業員の声などが、絶え

間なく響く。

真紀、Tシャツに短パン姿。奥の和室で腕立て伏

せ。

ドアを叩く音。

叩いているのは、千代。

一人娘の桜田智子（智子）、必死に母をなだめてい

る。

智子 お母さん。お母さんって。うるさくしたら、ご近所に迷惑。

千代 邪魔せんというて。工事の音の方がよっぽど迷惑。あの音に比べたらこれくらい。

千代、カマかせにブザーを押す。ブーブーと立て続けに三回押した後、再びドアを連打。

千代の振る舞いに苛立つ智子。
張り合っているうち、二人とも、どんどん大声になっっていく。

智子 バンバン、バンバン。止めて。ほんま止めて。

千代 あんたこそ、うるさい。退いて、そこ。

智子 大声出しても退かへんよ。私かて、真紀ちゃんに用事あるんやから。

真紀、大急ぎで玄関に向かう。

真紀 はい、ちよつと待って。

真紀、ドアを開ける。

工事の音に交じり、蟬の声。

真紀 千代さん。いらっしやい。

千代、玄関に入るなり、

千代 会長さんいてはる？

智子、千代に続き中へ。無言で、拝むポーズ。
真紀、智子に向かつてうなづく。

真紀 ごめーん、聡じい、おらへんねん。

千代 撮影？

真紀 う、うん。

千代 ああ、盆踊り大会の。

真紀 さあ、どうかな？ ここじゃなんやし、とりあえず上がって。

千代 そうかあ。じゃあ。

智子 おじゃまします。

千代、智子、座卓前に並んで座る。

同時に溜息をつく。

真紀 お茶飲む？

千代 (反応しない)

真紀、大声で。

真紀 千代さん、お茶いる？

千代 ああ。

千代、頷く。

真紀、冷蔵庫からペットボトルのお茶を2本取り出し、二人の前に置く。

『皆の団地（カイノウチ）』

真紀、グラスを持って「使う？」とアピール。

千代 ええ、ええ。そんなもん。

千代、ボトルを掴み、お茶を飲む。

千代 あー、美味し。

智子、ハンカチで汗を拭う。

智子 あれだけ歩きまわったら。そりゃ、喉も渴くわ。

真紀 そんなに？

智子 ここ（団地）出発して学校から公園から、この界限をぐるーっと。あーしんど、私もお茶いただいでいい？

真紀 どうぞ、どうぞ。

智子、お茶を飲み、再び溜息。

真紀 （千代に）聡じい、だいぶ遅なるみたい。

千代 そうかあ、ほな。

真紀 待って。

千代 え。

真紀 写真撮っていかへん？

千代 写真って。会長さんおらんへんのに？

真紀、カメラを持ち、

真紀 宿題やねん。

千代 宿題？

真紀 そう、夏休みの。「色んな人の写真撮りなさい」って。やらんと聡じいにめっちゃ怒られるねん。

真紀、千代に向かって拝むポーズ。

真紀 お願い。千代さん、手伝ってえ。

千代 そりゃ、手伝ったらんこともないけど。

真紀 ほんま？ ありがとう、めっちゃ助かる。

真紀、智子、千代に気づかれないよう目くばせしあう。

千代 それで？ 私はどないしたら。

智子 私も。

真紀 とりあえず、あつちに。

真紀、作業場に移動。スクリーンの色を変えるな

どして撮影準備。

千代、智子も移動。

真紀 千代さん、ここ座って。

千代、椅子に座る。

真紀 智ちゃん、見てあげてな、服とか髪とか。

智子（真紀に）わかった、姿見借りるね。（千代に）お母さん、ここ、ちよっとハネてるわ。

智子、千代に姿見を向けてやる。

千代、鏡を見ながら念入りに髪を撫でつける。

真紀 千代さん、撮ってもええ？

千代 （反応しない）

真紀、大きな声で。

真紀 千代さん、写すよ。

千代 は。

真紀 写真。

千代 ああ、うん。ええよ。

真紀 じゃ、手は前で軽く組んで。背筋伸ばして、息吸って、吐いて。息吸って、吐いて。そうそうリラククスしてそのまま。はい。一足す一は…。

千代 にいっつ。

真紀 はい、続けて。もう一枚。

全員 一足す一は、にいっつ。

フラッシュの光。

真紀、掛け声をかけながらシャッターを切る。

千代、何度かポーズを変える。

声が止む。

真紀、デジタルカメラを覗き込み、画像を確認。

真紀 はい。次、智ちゃんも入って、千代さんの後ろ。

智子 私も？ 遺影撮影なの？

智子、言いながら千代の後ろへ。

千代、智子をキッと睨み、

千代 あんた私を殺す気か。

真紀 はい、はい。千代さん、智ちゃん、おしゃべりはやめて。二人とも前向いて、カメラ見て。これはサービス。家族写真。

再びフラッシュ。

智子、遠慮して途中でその場を抜ける。

千代、真紀の注文に応じ、気取った様子でポーズ。

楽しそうに声をあげて笑う。

智子、母の様子を見て目頭を押さえる。

智子 私、ちよつと、おトイレ。

智子、撮影終了と同時にその場を去る。

千代 何やあれ？ 情緒不安定か。

真紀 千代さん。そんなこと言わんと。智ちゃんにも優しい言葉かけてあげてな。それでなくても色々あるんやからさ、女は。

千代、ぼかんと。

真紀、何か言いかけてやめる。

『皆の団地（カイノウチ）』

カメラを下し、画像を確認。

真紀 よし。

千代、真紀の背後からカメラを覗き込む。
真紀、振り向く。

真紀 どう？

千代 まあまあやな。

真紀、苦笑い。

千代 どないするん、これ。

真紀 とりあえず、置いとく。

千代 撮り終わったら？

真紀 終わらへん。まだまだ、撮るよ。

千代 何で？

真紀 何でって聞かれても、今は、数、撮ることしか考え
てなくて、

千代 考えてへんのん？

真紀 うん。まあ。

千代 あかんなあ。真紀ちゃんはまだまだ修行が足りませ
んな。

真紀 わかってる。だからこうやって、

千代 宿題、やらされてるのんか？

真紀 まあ。

千代 おじいさん目指すん？

真紀 わからん。

千代 厳しくないん？ 女の身で。

真紀 だから。わからんのやって。

千代 ……。

真紀 ごめん。

千代 ……。

真紀 何か色々、見失ってて。

真紀、うつむく。

真紀 正直迷ってる、このままいくか、もっと広い世界で
試すべきなんかかって。

真紀、顔を上げ、

真紀 千代さん、うちな、

千代、再びぼかんと。

真紀 え？

千代 ……え？

真紀 ああ、何もないよ、何も。

智子、戻ってきて会話に加わる。

智子 嬉しそうやったで、聡じい。「真紀がカメラマン目指

すらしい」って、

真紀 いつの話？

智子 高校の卒業式の帰りに言うたんやろ、跡継ぎたいみ

たいなこと。

真紀 さあ。

智子 何回も言うてはったで、自慢みたいに。

真紀 そう。

智子 自分も最初は新聞社でって、召集されて、従軍カメラマンになったって。

真紀 うん。

智子 凄いやな。生きるか死ぬかの場所で写真撮り続けて。年いってからは被災地通って。亡くなる直前まで現役で、

真紀 うん。

智子 真紀ちゃん、もったいないわ。せつかくええと就職できたのに。

真紀 ……

智子 今頃、がっかりしてはるで、聡じい。

真紀 ええやんか、もう。その話は。

智子 また、被災地巡って撮りいな。それか、どっかでスクープ写真狙うとか。

真紀 そんな簡単と違うよ。

智子 やれる時にやっとかんと後悔するで、私みたいに。後悔って？

真紀

智子、応えず。

智子 大丈夫。真紀ちゃんやったら出来る。

真紀 何を根拠に。

智子 よっ、学生写真コンクール大賞受賞者。

真紀 持ち上げてても、何も出えへんわ。

智子 何や、出んのかいな。

智子、真紀、笑う。

千代、キョロキョロと落ち着かない様子。

智子 ん？ くないしたん？ 千代さん。

千代 あ、あの子らは？

真紀 あの子らって？

千代 真紀ちゃんと同じ学校の。いつ病院から戻って来るん？

真紀 何で？

千代 何でって、これでも私、自治会の副会長ですもん。この団地で起こったことは、知っとかんと。

智子、真紀、顔を見合わせる。

真紀 帰ってるはずやけど。

千代 そりやないわあ。帰ったら帰ったで、こっちにも連絡しといてもらわんと。氣い張ったまんじや、私、身が持ちませんねん。

真紀 ごめん、千代さん。うっかりしてた。

千代 この「花森ひかり団地」に住む人はみな家族同然。何かあったらあかん思っつて、ずーっとこの界限パトロールしてますんやで、私は。

真紀 千代さん、ほんま、ごめんて。

千代 わかってくれたらいいけど。それで、あの子らの傷の具合は？

真紀 は。

千代 どないやった、顔に傷した、ほれ、あの女の子。

智子、小声で真紀に。

智子 美香ちゃんのことちゃう？ 震災の時の。

真紀 うん。

千代 可哀想に。嫁入り前の娘やのに。巻き込まれたってなあ。女の子の取り合いの喧嘩に。

真紀・智子 え？

千代、震災時の話と別件をごちゃまぜに。

真紀と智子、戸惑いつつも、千代の話に合わせようとする。

真紀 あー、えーっと。

智子 聞いたことある。その取り合い。

真紀 違うよ、そんなと。

智子 そうなん？

真紀、うなずく。

真紀 ゆうに惚れた年上の男がしつこくて。困ったゆうが

長瀬に頼って、放っておかれへん長瀬が、男と話つける

ことになって、

智子 それで長瀬君が男に刺された。

真紀 ブーやな。ゆうがいきなり「死ぬ」言うて、泣きながらナイフ取り出して、「危ない」言うて長瀬がそれを取り上げようとして揉み合いに。それ見たミカリンが、長瀬のこと庇おうとして、バランス崩して、倒れ込んだ拍

子の事故。

智子 三角関係？

真紀 ううん。さらに上いく歪さ。

智子 歪て。

真紀 自分のこと好きすぎるゆうと、ゆうのこと好きすぎる年上の男と、そこに巻き込まれた、お人よし過ぎる長瀬と、長瀬を好きすぎるミカリンの組み合わせ。

千代、突然、暗室にいるらしい聡（故人）に向かって話し掛ける。

千代 心配ですねえ、ほんま。

真紀、智子、ちらりと千代を見る。

千代 それは、会長さんにお任せします。はあ、はあ、はあ、あー、あー、そうですかあ。

真紀、智子、視線を戻す。

智子 真紀ちゃんは何？

真紀 うちは、部外者。

智子 部外者？ 長いつきあいやのに？

千代、顔をしかめ、

千代 まだ子供やのに、そんな。

真紀、笑いながら、

真紀 長いつきあいやからこそ、部外者やねんて。

智子 どういう意味？

真紀 うちな、ほとぼしつてる奴苦手やねん、好きや嫌い
や、愛してるや、憎んでるやなんて過剰やん。しかもみ
んな自己愛の域出てへんし。あの中で言うたら長瀬だけ
まとも。別格のお人よし。っていうかアホ、未だにゆう
に振り回されてるみたい。

千代、見えない聡との会話を続けている。

千代 せんないことですけど（しょうがないの意）、未だに。
どない言うたらええんでしょうねえ、あの時の心細さは
ほんま、経験したもんでないと、

真紀、千代を気にして振り返る。

千代、にこやかに笑う。

千代 そんな、お互い様ですやん、ええ、ええ、わかりま
した。心配せんと出張行って来て下さい。あの子らのこ
とは私が。詳しいことが分かり次第、報告させてもらい
ます。

間。

智子 部外者の割には気に掛けてるやんか。あの子らのこ
と。

真紀 そんなん違うよ。何かある度、ミカリンが押しかけ
てきて一方的にダーツと。うちはその話、ういか愚痴を
聞いてあげてるだけ。

千代、おずおずと真紀に、

千代 あのお。

真紀 どないしたん？ 千代さん。

千代 私、そろそろ。

智子 帰る？

千代 ううん。怪我のお見舞いに。

智子 行かんでええよ、お母さん。

千代、声を尖らせる智子を無視し、

千代 どこやったかいなあ。あの子らの家は。

真紀 ミカリンやったら、駅前のマンションに引っ越した
で。長瀬はすぐそこ。この棟の三〇五号室。前は五号棟
やったけど、引っ越してきて一人暮らし。

智子 ちよつと、真紀ちゃん。

千代 そうかあ、おおきに。

真紀 うん。

千代 じゃ、ここらで私。

千代、立ち上がる。

智子 待って、お母さん。行ったらあかん。

千代、智子を睨む。

千代 あかん、あかんて何で？ 何で私がお便所に行った
らあきませんのん？
智子 え、おトイレ？

智子、おし黙る。

千代 （智子に）ほんまにあんたは、いちいち私のするこ
とに口出ししてきて。（真紀に）真紀ちゃん、悪いけど、
お便所貸して。
真紀 どうぞ、どうぞ。

千代、もう一度智子を睨み、トイレに行く。
智子、深い溜息。

真紀 千代さん、あれやな、何かこう波が。
智子 激しなつてきてるやろ、前より、だいぶ。

智子、再び溜息。

智子 限界なんかなあ、もう。

真紀 施設のこと？

智子 うーん。

真紀 どうするん？

智子 ケアマネさんから「できるだけ早い方が」って勧め
られるんやけど、

真紀 けど？

智子 お母さんの気持ち考えると、踏ん切りが。

真紀 未だにパトロール、してくれてはるねんもんな。

智子 本人はそのつもりでも、これ以上ついて廻るわけに
はいかへんし。

真紀 そうやなあ。

智子 お母さん無駄に足速いねん、急に飛び出して事故と
か、もしものがあつたら思うと、

智子、胸に手をあてる。

智子 ここらへんがキューツて。
真紀 困るよな。目え離されへんのが、一番。

智子、思い出した。

智子 そうや。あれ、忘れんうちに。

智子、鞆から小物を取り出す。掴んだものを一つ
ひとつ、テーブルに置く。

智子 撮影代。

真紀 ええよ、今でなくても。

智子、ポーチやスーパの袋やティッシュなどを、
出したり引つ込めたり。ようやく財布を取りだす。
と、荷物の中に紛れていたパチンコ玉が転がり落
ちる。

真紀、玉を拾う。

智子 あれ、そんな玉どこから。

真紀、拾った玉を智子に渡す。

真紀 止めるんやなかったん？ パチンコ。

智子 まあ、そうやねんけど、たまたま。

真紀 ふーん。

トイレトペーパーが回る音。

真紀、トイレの方向を見る。

真紀 出てくるで。はよ財布しまわな。お金見て前みたいなことになったら。

智子、慌てて財布を隠す。

二人、千代の様子を伺う。

出てくる気配がないのを確かめ、

智子 「盗人」って、なあ。

真紀 突然スイッチ入った感じやったもんな。

智子 実の娘やで。盗るわけないやん。ってか、誰も盗ってないし。お母さんが、財布にしまい忘れただけやし。

真紀 氣い遣いの千代さんらしいやん。

智子 ……。

真紀 ヘルパーさんらにはまだどっかで遠慮してるねんで。その分、ストレスの矛先が智ちゃんに向かってるんと違

う？

智子 情けないわあ、ほんま。

真紀 そんなこと言わんと。今日の分は今度またあらためて。

智子 ごめんなあ、真紀ちゃん。

智子、出したものを鞆にしまいこむ。

真紀 遺影（撮影）、今日で何回目やったっけ？

智子 一、二、三……五回。

真紀 そんななる？

智子、うなづく。

智子 聡じいが亡くなった次の年からやもん。

真紀 そっか。

智子 震災の時、燃えたり何だりでええ写真ぜんぜん無くて、葬式の際にどこの家もえらい難儀したって話が忘れ

られへんくて。

真紀 うん。

智子 でも、そろそろ止めやな。

真紀 何で？

智子 真紀ちゃんに迷惑かけてばっかり。顔の表情かてだいぶばやけてきてるし。

真紀 そんなつもりで言うたんやないよ。

智子 わかってるけど、

真紀 写真、数あった方がええよ。聡じいの時も無くて困ったもん。人の写真ばーっかり撮って、自分の分いうた

ら大昔の写真しなくて。見つけた写真は、どれもびつくりするほどのイケメンで。「えー、誰これ？ これが聡じい」言うてみんなでキヤーキヤー言うて笑つて。

智子、思い出し笑い。

智子 仏さんの前で「写真、写真」で、なあ、
真紀 「ええかげんにせえ」つて、「聡じい化けて出て来るでえ」言うて。

智子 賑やかやったな。

真紀 特に千代さんな。

智子 葬式やいうのにな。

真紀、智子、笑う。

千代、トイレ内で何度か咳をする。

真紀、立ち上がり、トイレをノック。

大声で。

真紀 千代さん、大丈夫？

千代、苦し気に。

千代 大丈夫。

真紀、戻る。

真紀 お気張り中。

二人、笑う。
真紀、突然拳を上げ、

真紀 千代さん、最高。最強。

智子 何、急に。

真紀 ずっと見守ってもらってたなって。

智子 あの時はまだお母さんもしゃんとしてたから。

真紀 連れて来たつてな、千代さん。てか、うちが千代さんに会いたいから。

智子 真紀ちゃん。

智子、大きく手を広げて真紀をハグ。

二人、びたつくつついたまま。

智子 なあ。

真紀 ン？

智子 三〇五号室。リノベーションしてどんな間取り？

真紀 何で？

智子 戻ろーかなーつて。ここ（団地）に。

真紀 嘘やん。

智子 お母さんと私、水と油やのにつて？

真紀 そこまではよう言わん。

智子、笑う。

智子 それ、言うてんのと一緒。

真紀 いやいやいや。

智子 氣い遣わんでもええよ。子供の頃から自覚してたこ

とやもん。嬉しそうにノブ兄いの世話焼いてるお母さん見て、私の居場所なんかないねんなつて。

真紀 よう家出してきてたよね、ここに。

智子 「ウチ来るか」って聡じいが。何回助けてもろたか。

真紀 智ちゃん来てくれてこつちも助かった。家全壊で親死んで、おじいさんの家や言われて来たものの、聡じいあんなんやし。

智子、驚く。

智子 何で？ 優しかったやん、聡じい。

真紀 まあ、そうやねんけど。あの頃うち七歳やで、そんな風には。何か言うたら、進駐軍はどうとか訳のわからん戦時中の話始めるし。

智子、笑う。

智子 失ってから気づくパターン？

真紀 智ちゃんかて一緒やん。居なくなると寂しいやろ、

ノブ兄いかて、千代さんかて。

智子 一緒くたにせんで、千代はまだ生きとるわ。

真紀 千代つて。まだつて。

真紀、智子、くすくすと笑い合う。

真紀 嬉しかったなあ、聡じいの帰りが遅なる日。学校から帰ったら、千代さんがおやつ作って待っててくれて。友達呼んで、皆で食べて。楽しくて、美味しくて、夢み

たいやつた。千代さんみたいなお母さん持った智ちゃんか、羨ましかった。

智子 私からしたらぜんぜん。文句ばかり言われて、窮屈で、窮屈で。それが嫌で飛び出した家やけど、今となつてはなあ。電車乗って毎日通ってくるのもしんどいし。

問。

真紀 一年かあ。早いな、ノブ兄い。

智子 一年と四カ月。

真紀 バリバリの営業マンがなあ。

智子 天職や言うてた。ノブ兄い、車好きやったから。

真紀 震災で店潰れて、長距離トラックの運転手になつて、行かんで済んだ場所にわざわざ寄つて、結局は、

智子 代役でなあ。ぎっくり腰で休んだ先輩の。

真紀 色々あつたな。びっくりしたわ。あんな千代さん見たん、あん時が初めて。

智子 私も。ああ、やつぱりお母さんは私よりもノブ兄い

の方が大事やつたんやなつて。心壊れるくらい、愛してたんやなつて。

真紀 ……。

智子 欠けた記憶を無理くり補填して、未だにノブ兄の帰りを待ち続けて、

真紀 聡じいのことな。

智子、うなづく。

智子 凄い思うわ。つじつま合わへん事だらけやのに、尽

きることない愛情でもって、パラレルワールド成立させてもうてんねんから。

真紀 まあな。

智子 逆にお父さんのことはいっつも聞いても、「死んだ」って言う。「交通事故で」って、はい、即終了。

真紀、笑う。

真紀 深いな。

智子 どころがよ。根深いだけやん、積年の恨みがこんな形で、

真紀 モテてたからなあ、おっちゃん。

智子 知らんけど、巻き込まれた身としてはただただ迷惑でしかなかったって話。

真紀 ええのん？ もう。

智子 さあ。

真紀 戻りついでにするん？ リノベーション。

智子 それも、さあ。迷い中。

真紀 三〇五号室、1LDKにした。すっきりしてたで、

壁ぶち抜いてフローリングにして。長瀬のお母ちゃん、可愛い可愛い一人息子のためにぼーんと一括、キャッシュで購入したんやって。

智子 徳間病院の長瀬さんな。

真紀 あれ？ 知ってた。

智子、うなづく。

智子 うちの病院の看護師長やし。

真紀 え、何で？

智子 転職した。

真紀 いっ？

智子 先月。前と同じ医療事務で。お母さんこんなやし、職場もできるだけ近所の方がええかなあと思って。

真紀 雪解け？ 歩み寄り？

智子 え。

真紀 着々とやな、なんか。

智子 そんな風に見える？

真紀 うん。

智子 私からしたら逆、逆。暗中模索を地でいって、ずぶずぶと沼地にハマリに行ってる気分。

真紀 それは酷いな。

暗い話題で笑い合う二人。

水が流れる音。

真紀 あ。

真紀、智子、視線をトイレに移す。

智子、指先で輪っかを作って見せ、小声で、

智子（お金）なんぼでも渡す時間あったやん。

真紀 しっ。

千代、トイレから出る。

千代 真紀ちゃん、お便所ありがとう。

真紀 うん。
千代 ほな、さいなら。

千代、荷物も持たずに玄関へ直行。素早くドアを開け外へ出る。
智子、真紀、同時に立ち上がり、

智子 お母さん。
真紀 千代さん。

玄関ドアが閉まった直後に、ガタンと金属性の何かが崩れるような音。
智子、真紀、大慌てで千代を追う。

(四)

二〇一七年。八月末。夜。
三〇二号室。

時折、ヒグラシの声。
ワインを飲む、真紀とナオミ。
ラジオ。曲が終わり、芸能ニュースが流れる。
真紀、ラジオを消す。

ナオミ 乾杯しよ、乾杯。
真紀 やったやないですか、三回も。
ナオミ じゃあ、もう一回。カンパニー。

ナオミ、手にしたグラスを無理やりぶつけ、ワイ

ンを一気飲みする。

真紀 ピッチ早すぎ、飲み過ぎですって。
ナオミ 大丈夫、大丈夫。

真紀、立ち上がり、水を持ってくる。

真紀 はい。
ナオミ 何？

真紀 飲んでください。
ナオミ 嫌よ。せつかくの酔いが醒めちゃうじゃない。
真紀 (身体に) 障りますから。

ナオミ ふん。何をどう気をつけても結果は同じ。
真紀 だからって、ヤケになるのは。

ナオミ だってそうでしょ。よりによつてこのタイミングで、いきなり突きつけられたわけだから。秀人にとつて私は女じゃなかった、認められていなかったって。

真紀 それは。
ナオミ 何が結婚よ。何が妊娠三か月よ。記者会見までして偉そうに。

真紀 この前会った時は、どんな感じやったんです？
ナオミ 別に。新しい振りの確認とか。

真紀 手術のことは？
ナオミ 言わない。言いたくないし、言うわけない。

真紀 言われたんでしょう「これからも一緒に、頑張っていきましょう」って。

ナオミ それは。
真紀 認められてるじゃないですか、ちゃんと。

ナオミ 気やすめ言わないで。

ナオミ、膝を抱える。

真紀 ナオミさん。

ナオミ そんなじゃないの。そんなじゃないなくて、私は、

ナオミ、ガクツとうなだれる。

真紀 もう、飲み過ぎですつて。ほら、これ。

真紀、ナオミを支え、グラスを持って水を飲ませる。

ナオミ、いきなり真紀に抱きつき、涙声で、

ナオミ ありがとう、真紀ちゃん。

真紀 わ、わ、こぼれますから。

真紀、グラスを置く。

真紀 ナオミさん。

ナオミ わかっている。

ナオミ、真紀から離れる。

ナオミ 忘れる。今は手術成功させることだけ考える。

真紀 忘れる？ 秀人さんのこと？

ナオミ 全部。

真紀 全部って。

ナオミ 噂とか？

真紀 噂？

ナオミ スキヤンダル。震災後の一時期、行方不明になっ

たつて騒がれたことがあった。

真紀 スキヤンダル？ ナオミさんが？

ナオミ 知らない？

真紀、うなづく。

真紀 うち、TVないし。

ナオミ ああ。

真紀 震災って、こっちの？

ナオミ ううん。あっち。ドラマのロケで。道路遮断され

て、帰るに帰れず。

真紀 へえ。

ナオミ 避難所に行けば良かったんだけど、顔差すのが嫌

で。マネージャーと移動しながら、車で寝泊まりして二

週間。

真紀 それで？

ナオミ 「空白の二週間」って

真紀 空白？

ナオミ 「被災地にて婦女暴行事件多発、被害者の一人は

朝ドラ女優沖ナオミ」ってネットで。抑える手立てもな

く、一気に拡散。

真紀 そんな。

ナオミ ネットの次は週刊誌の後追い記事。あることない

こと書かれて。何もかも嫌になって、養成所時代の仲間

を頼ってこちらに。

真紀 そうだったんですか。

ナオミ まさか、ダンス講師兼振付師って肩書で仕事することになるとはね。自分でもびっくりだけど、後悔はしていない。気持ち切り替えて良かった。あの黒い噂が発端だったってことは複雑だけど。

間。

真紀 しましたっけ？ この話。

ナオミ え。

真紀 震災直後、ゆうって同級生が誘拐されかけた話。

ナオミ 誘拐？

真紀 ええ。小学一年の時に。

ナオミ ……。

真紀 よその県から来た男の車に引きずり込まれそうになつてたところを幼なじみの長瀬が見かけて、大声出して未遂に。

ナオミ そう。

真紀 後になって、「いたずらされたらしい」って噂が。

ナオミ いたずら？ 小学生一年って、さつき。

真紀 七歳。ゆうすんごい美少女でモデルとかやってて目立ってたから。もしかしたら、本当にやられちゃったのかも？って。

ナオミ 「何となく？」とか、「かも？」とか、そんな曖昧なこと。

真紀 確信犯。

ナオミ 確信犯？

真紀 十年後なんです。噂出たの。うちらが高校生の頃。

ビラとか投書とか、極めて悪質、陰湿なイジメ。

ナオミ そう。

真紀 何なんですかね。酷い目に遭っても明るく生きる人間と、とんでもないことをしでかす人間。その境目ってどこにあるんでしょうね。

ナオミ 表裏一体かもね、今の時代、誰しもがどつちに転ぶかわかんない。

真紀 自分の身は自分で守るしか、

ナオミ それでなの？ ずっと体鍛えてるでしょ、あなた。その頃から臨戦態勢なわけ？

真紀、応えない。

真紀 酷い話。流された一つの噂に尾ひれがついて、人の

人生狂わせるところまで広がって。それ自体が犯罪って言うっていいくらい。

ナオミ 二重三重に罪深いわね。実際に被害に遭った人たちの気持ちとか考えると。

真紀 腹立ってしょうがないです、傷ついた人をさらに貶めようとする奴ら。同列になりたくないんでしませんけど、

叩きのめしてやりたいですよ。今でも。

ナオミ 男前ね。真紀ちゃんは。

真紀 褒められてる気しないんですけど。

ナオミ あら、そお。

真紀 部外者ですからね、自分は。

ナオミ 何それ？

真紀 震災で両親亡くして、祖父を頼ってここ（団地）に

来たものの、馴染みきらんまんま漂ってるっていうか。嫌な目に遭ったとかではないんですけど。

ナオミ 流れ流されこの場所、か。

真紀 え。

ナオミ わかるわ、私も似たようなものだから、

間。

ナオミ それで、犯人は？

真紀 誘拐未遂の犯人は捕まりましたけど、イジメの方は、ぼかさされて終わり。

ナオミ、不満げに。

ナオミ ありがちな展開ね。

真紀 ゆう、精神的に不安定になって、何回も自殺未遂起こして、その度に長瀬が世話してて。私から見ると、友情から出た行動ってわかるんですけど、長瀬の彼女が二人のこと疑い出して、それはそれでややこしくて。

ナオミ 寂しいんだろうね。ゆうちゃん。

真紀 ですね。

ナオミ 見守られてるってことがちゃんとわかれば、落ちて

着くんじゃない。

真紀 だといんですけど。

ナオミ よし、私も頑張る。手術成功させて、胸張って、しれーっと秀人と再会する。

真紀 何ですか、急に、その自己完結。

ナオミ まずは五年、絶対に生きてやる。

真紀 五年と言わず、十年と言わず、ボロボロ、ズタズタ、皺くちゃのおばあさんになるまで、生きてください。

ナオミ 真紀ちゃんこそ、何。

二人笑う。

ナオミ、グラスを掲げ、ワインを飲み干す。

ナオミ さ、今日は飲み納め。明日からは治療に専念したいと。

真紀 ナオミさん、それって万年ダイエッターの言い訳と同じ。

ナオミ、聞いていない。

ナオミ、乾杯しよ、乾杯。

真紀、あらたまった様子で。

真紀 ナオミさん。

ナオミ え。

真紀 好きですよ。いい女だと思ってます。今までも、これからも。

ナオミ 真紀ちゃん。

ナオミ、再び真紀に抱きつく。

勢いが強すぎて、二人同時に寝転ぶ。

ナオミ、起きる。

ナオミ その言葉、秀人から聞いたかった。
真紀 えーっ。

真紀、大袈裟に苦笑。起き上がる。
ナオミ、微笑もうとして、ふいに言葉を詰まらせる。

ナオミ どうして、

間。

ナオミ 消えちやう、全部あつちに持っていかれちやう。

輝ける未来。幸せそうに並んで、目尻下げながら赤ん坊抱いて、

ナオミ こっちは、抗癌剤やって、手術やって、放射線（療法）やって。

真紀 ……。

ナオミ 産めないじゃないよ、もう。なくなっちゃうんだよ、もう。

真紀 ……。

ナオミ、天井を仰ぐ。

ナオミ 報い、なのかな。

真紀 報い？

ナオミ Yの字の真ん中で、当たり前のように女優の道を選んだ。

真紀 別の道を選んでいたらって？

ナオミ、首を振る。

ナオミ 「たら、れば」の話じゃなくて。
腹に手をあて、

ナオミ 今さらだけど。

真紀 ……。

ナオミ あの時、葬らなければ、私も葬られることなかったのかなって。

真紀 ……。

沈黙。

真紀 後悔？

ナオミ ううん。

真紀 なら。

ナオミ ……。

真紀 結果、輝けたんですから。今だって、ちゃんと、

ナオミ、真紀の顔を見詰める。

手を握ると、強引に着ている服の中に引き入れようとする。

抵抗する真紀。

真紀 な、何ですか？ いきなり。ナオミさん、ちよっと。

ナオミ お願い、真紀ちゃん。

真紀 いやいやいや。
ナオミ お願い、一回だけ。

真紀、手を振りほどく。

真紀 説明してください。ちゃんと。
ナオミ 覚えておいて欲しいの。誰かに。今のうちに、
真紀 撮影したところじゃないですか。
ナオミ もっと、直接的な方法で。
真紀 おっしゃっている意味が、

ナオミ、あらためて真紀の手をとり、自分の方へ。

ナオミ 証人に。

真紀 触れと？ 私に？

ナオミ、うなずく。

真紀、手を伸ばす。

神妙な顔つきの二人。

ナオミ どう？

真紀 どうって？

ナオミ 感想。あるでしょ。大きさとか、柔らかさとか？

真紀 あったかいです。

ナオミ ……生きてるからね、まだ。他は？

真紀、ナオミの気持ちをほぐそうと、

真紀 でかいですね。自分のより何十倍も。叶姉妹ばり。
ナオミ バカね。

ナオミ、笑う。

ナオミ 動かしてみて。

真紀 え。

ナオミ パフパフやってやって。

真紀 パフ、

真紀、少しだけ手を動かす。

ナオミ あん。

真紀 え。

ナオミ 仕返し。

真紀 もう。

真紀、手を離そうとする。

ナオミ ごめんごめん。しないから、続けて。

真紀、真面目くさった様子で。

真紀 質感はなめらか。ふわふわしてます。柔らかいです。

マシヨマロみたい。

ナオミ 正解。

真紀、驚く。

真紀 正解？ 何が。
ナオミ 「マシヨマロ美肌だねー」 って、あいつ。

ナオミ、顔を歪ませる。
何とかして笑おうとするが、失敗に終わる。

ナオミ おっばい。私の、

間。

ナオミ 切りたくないよお。

真紀、包み込むようにしてナオミを抱く。
うんうんと頷きながら、震える背中をさすり続ける。

(五)

二〇一七年。九月。日曜日（工事休み）
三〇二号室。

来客。幼馴染の広瀬美香（美香）。

真紀、作業場に立ち、腕組みしながら美香の話を聞いている。

美香、撮影用のイスに座っている。
足下には、大きなバッグ。

美香 アホか、ちゆうねん。

真紀 相変わらずやな、長瀬は。
美香 腹立って、腹立って、持ってた中華麺投げつけたっ
た。

真紀 それはあかん。食べ物粗末にしたら、
美香 ……。

真紀 それで、あいつは？

美香 ゆうんとこ、行ったつきり。

真紀 自殺でなくて良かった。

美香 そんな、最初からわかってた。確認できた時点で

さっさと帰って来いよって話。

真紀 麺は？

美香 え。

真紀 中華麺。捨てたん？

美香 捨てへんよ。そんなことしたら千代さんにしかられる。

る。

真紀 出た、千代さんの教え。

美香 三つ子の魂百までって奴。

真紀 投げた袋拾って、調理して、いただきますって？

美香 うん。

真紀 プロセス最悪。味は？

美香 罰ゲームみたいやった。

真紀 そりゃ、不味なるわ。

美香 うん。腹ん中煮えくり返ってたけど、焼きそばは

滅茶苦茶上手に作れた。皿に山盛り二人分。ひとりぼつ

ちでたらふく美味しゅういただきました。

真紀 それが罰ゲーム？

美香 そ。

美香、うなづく。

美香 超絶品やで、どない思う？
真紀 知らんわ、そんなん。

間。

真紀 なあ、久しぶりやし、写真でも撮っていく？

美香 写真は、今度。

真紀 今度って？

美香 近いうち。気分変えてから。

真紀 そうなん。

美香 髪切ろうかな、って。

真紀 巻き髪目指して伸ばすんやなかったん？

美香 別れようか思って、サトルと。

真紀 またあ、そんなベタな選択を。

美香 別れるもなにも、付き合ってもない段階やねんけど
な、私ら。

真紀 付き合っていないことはないやろ。

美香 決定的なこと、言うてくれたことないし。

真紀 そういふ奴やん長瀬は、昔から。

美香 そうやけど。

真紀 一緒におるってことが、そういうことなんやと思わ
んと。

美香 我慢しろって？

真紀 うん。

美香 ゆうから電話かかる度に飛び出して行っても？

真紀 言わんとすることはわかるよ。長瀬は友達思いのい

い奴やけど、ちよいちよい優先順位間違えよるから。

美香 ええかげん、しんどなってきた。私ばかり追いか
ける気がして。

真紀 それも見ててわかるけど。

美香、立ち上がり、スタジオ内にある姿見の前で
手早く髪をまとめ上げる。露わになった頬には長
く引き皺れたような傷。ぷっくりと膨らんだその
傷痕を指で撫でる。

美香 これ。

真紀 え。

美香 もしかしたら、この傷のせいで、サトルは私から離
れられへんのかも。

真紀 どういうこと？

美香 可哀想って思われてるんかもなあって。女として。

真紀 同情やって？ 何でそんな。

間。

美香 ゆうのことは、自分なりには大目に見てきたつもり。

男女のそういうんやないと思ってたから、余裕あったっ
ていうか。

真紀 うん。

美香 あの子ん家、家庭環境複雑やん。本当のお父さんは
最初からおらへんくて、義理のお父さんが何人もおって。

お母さんは恋に生きるタイプの人で、ゆうのことはずつ
と放ったらかし。そやのに、美少女やいうて町内で騒が

れ出した頃から急に擦り寄ってきて、モデルや、お水系の仕事するよう仕向けて、自分はマネージャーみたいなこととして。それならそれでちゃんとしてたらしいのに、肝心な時に限っていつもハズシて、誘拐されそうになつた時も、イジメが起きた時も、自殺未遂起こした時、ただただ酔っぱらって、おろおろして、泣いたり、わめいたり。

真紀 まあな。

美香 人ん家のことやけど酷いなって、可哀想やなって。

あんな感じになつてしまふ、ゆうの気持ちわからんでもないなって。

真紀 わからんでもないって？

美香 誰かにすがりたくなる気持ち。

真紀 ……。

美香 ゆうにとつてサトルは、幼馴染やし、恩人やから。

よけい執着するんかなって。

真紀 確かにな。けど、そんなゆうとミカリンが長瀬の中で同列に思われてるって仮説には、違和感。

美香 サトルからしたら楽なんやと思う。私、普通やから。団地で生まれて、お父さん、お母さん健在で、金持ちや

ないけど、貧乏でもなくて、団地引越してマンションに住んで、のほほんとしてて、幸せな位置におらせてもらつてると思う。この傷のこと除けば。

間。

真紀 覚える？ 地震の時のこと。

美香 ううん。テレビ飛んできた話は聞いたけど。怪我し

た時のこととかは、ぜんぜん。

真紀 うちは覚える。前の家のこと。目の前がぐらぐらして、あつ、と思つた時には、柱も壁も全部覆いかぶさるように崩れてきて、

美香 覚えてるんや。

真紀 割と。親のことは薄めやけど、余震とか、避難所のこととか。

美香 何でやろ。避難所のこととかは、覚えてるのに。

真紀 知つた？ 人間の脳って、辛すぎる記憶は自動的に消去してしまうんやって。

美香 ……。

真紀、美香の反応を探るように。

真紀 そうかあ。テレビなあ。

間。

美香 おつたで。「この団地に住んでたお蔭で死なずに済んだ」言うて拌んでるお年寄り。

真紀 団地のお蔭？

美香 一棟も倒壊せんかったんよな、ここ。部屋ん中ぐちゃぐちゃ。壁もだいぶひ割れたけど。

真紀 確かに。

美香 私としては複雑やつてんけど。

真紀 複雑って？

美香 親から「打ち所が悪かったら死んでたかも」って。言われる度に有難いつて思うようにしてたけど。よう考

えたら、この団地の中で一番酷い被害受けたんは、私なんちやうんって。

真紀 ……。

美香、傷に触れながら、

美香 助かった。かわりに、こんな極印押されてもうた。

真紀 そんな言い方やめとき、自虐的すぎるわ。

美香 自虐やないよ。実際、イジメられたこととかあったし。

真紀 ……。

美香 それか、避けられるか。

真紀 避けられた？ 誰に？

美香 一番身近な例はうちの家族かな。この傷のこと誰も触れへん。普通に、避けてることすら気づかん感じでも。

真紀 それは、普通やと思ってるからやん。

美香 やろな。

真紀 それって、あかんことなん？ それもこれも含めてミカリンやないん？

沈黙。

美香 なあ、何て言うた思う？ サトル。

真紀 え。

美香 初めてこの傷見た時の反応。

真紀 小学生の頃やんな？

美香 うん。

間。

真紀 何て？

美香 「お前の頬つぺたピンク色やな、綺麗な。触らしてー」って、スーって指で撫でられた。「ええよ」とも何とも言わんうちに。

真紀 どう思った？

美香 びっくりした。綺麗やなんて、言われたことなかったら。

真紀 それで、恋に落ちたん？

美香、吹き出す。

美香 違うわー。けど、助かった。覆面レスラーもどきになる選択は消せたから。

真紀 優しいな、長瀬。

美香 うーん。どうやろ。

真紀 え。

美香 ほんまにそう思ったから言うただけなんちやう。

真紀 そっか。

美香 って、サトルのこと、今までずっとそう思ってきた。

でも、これまでサトルに庇われて生きてきたんかなって。弱い人間がいたら近づいて、助ける。それがあいつの基本原理ちやうんかなって。

真紀 さっき言うてた、同情ってそれ？

美香 うん。

真紀 アホらし。考えすぎやわ、そんなん。

美香 そうかな？

間。

真紀 この前ここでヌード撮影してんで。

美香 へえ。

真紀 乳癌患者からの依頼。

美香 そう。

真紀 「撮って」って言われて、胸の傷とかも全部撮って

ん。

美香 傷？

真紀 うん、最初の手術ん時の。

美香 ……。

真紀 ミカリンさあ、マイナス方向にばかり考えるのは止めた方がええで。今の時代、ほんまに嫌なら整形するって選択かてできるわけやし。

美香 整形。

真紀 乳房再建手術するねんで、その人。全摘出手術終えて、落ち着いたらって。

美香 嫌やな私は、今の段階で整形は。

真紀 段階って？

美香 確信が持てるまではやらへん。ヒント出したくないから。

真紀 ヒント。

美香 傷痕消えたとたん結婚とか申し込まれてみ、ひかへん？ 結局見た目で選ぶねんとか思いたくないやん。

ゆうのことも含めて。

真紀 検討してるんや、整形。

美香 え？

真紀 さっきの、結婚決まったらするって話やんな。

美香 出た。真紀ちゃんの裏の顔。人がサラッと流した話をそんな風に拾って。

真紀 何のなんの、こんなんで裏とは言わへんよ。序の口より下の方、序の序やで。

真紀、美香、笑う。

真紀 冗談はさておき。ありやない？ 長瀬はどう言うか

知らんけど。

美香 それもあり？

真紀 うん。ありあり。少なくともミカリンの心を疼かせてる傷、消せるんやったら。それだけでも、（整形）やってええ気がする。

美香、考え込む様子。

真紀、背伸びしながら、

真紀 うーっ、喉渴いた。何か飲む？

美香 うん。

真紀 何がいい？

美香 アイスコーヒー。

真紀 さっきから気になってんけど、何その荷物？

美香 お泊りセット。

真紀 お泊りセット？

美香 あかん？

真紀 ええけど、別に。

美香 やったー。久しぶりに真紀ちゃん家にお泊り。
真紀 あのださー。うちのこと元カレ扱いするのやめてくれる。

美香、低めの声で、

美香 「美香、お風呂一緒に入るかあ」とか言うてみて。
真紀 言わんわ。うちのお風呂場は、聡じいの代からずっと暗室。銭湯行くのに、何でそんな、
美香 えへ。
真紀 えへ、て。

間。

真紀 コンビニ行こうかな。
美香 え。

真紀 コーラ飲みたなった。渴いた喉を潤すシユワシユワ。
どうする？ ミカリンも行く？

美香 うん。行くいく。アイス買ってこ。

真紀 あ、私も。

美香 ずるい。じゃ、私はビール。

真紀 そっちの方がずるいやん。

真紀、美香、財布片手にいそいそと出かけていく。
暗転。

二〇一七年一〇月下旬。夜。
前夜から断続的に続く雨。強風。
ラジオからは、季節外れの大型台風が間近に迫っているとの情報。

美香、暗室（風呂場）にて現像作業中。
お団子頭。スエットスーツという格好。

暗闇に灯る、赤外線ランプの頼りない光。
現像しているのは、ナオミの写真。

真紀、引き伸ばし機を使って用紙に画像を焼き付けてから、一枚ずつ丁寧にすぎ作業をする。

すぎ終えた用紙をワイヤーに吊るして乾かす。
浮かび上がってきた画像の仕上がりを確認する。

それらの作業を繰り返す。

玄関ブザーが鳴る。

真紀 はい。どちら様ですか？

智子 私。ごめんね、遅くに。

真紀 智ちゃん？ ちょっと待ってくれる。今、現像してて。

真紀、慌てて作業を中断。

智子 手え離せんのやったらそのまま。お母さん、来ない？

真紀 来てないけど。

(六)

智子 どないしよう。目離した隙におらんようになってしまった。

真紀 ち、ちょっと待って。

真紀、大急ぎで片づけ、電気をつけ、玄関ドアを開ける。

雨と風の音。

智子、カッパを着、懐中電灯を持っている。

智子 真紀ちゃん。

真紀 おらんの？ 千代さん。

智子 う、うん。

智子、動揺した様子で何度も頷く。

真紀 いつから？

智子 夕方。

真紀 そんなんやったら、すぐ連絡してくれたら良かったのに。

智子 雨やし、そんな遠くには行かへんやろ思ってた。

真紀 警察へは？

智子 一応、さっき連絡した。

真紀 自治会は？

智子 今、役員さんらが学校とか、公園に向かってくれてる。

真紀、智子、うんうんと頷き合う。

真紀 ちよっと待って、私もすぐ支度して合流するから。

智子 真紀ちゃんはどこにおって。

真紀 遠慮せんでええよ。

智子 ううん。真紀ちゃんはここで。お母さん来るかもしれへんし。

真紀 わかった。それなら、待っとく。

智子 じゃ、私。

真紀 うん。

真紀、去ろうとする智子に向かって、

真紀 智ちゃん。

智子 え。

真紀 きつと見つかる。何かあったらすぐ電話して。

智子 うん。

玄関ドアが閉まる。

うろろと落ち着きなく、部屋を移動する真紀。

間。

雨風の音。

千代の叫び声が重なる。

千代 誰かあ。誰か助けてえ。人殺しい。

智子 お母さん。もう、お母さん、って。大声出さんとい

て。智子よ、智子。お母さんの娘。わかる？

美香 そうですよ。千代さん、落ち着いて。

真紀 どないしたん？ 千代さん。

智子、ドアを開け、廊下に出る。

美香・智子 真紀ちゃん。

智子 お母さん、わかる？ ここ、会長さんところ。

千代 会長さん？

一同、なだれ込むように部屋の中へ。

一同 はーっ。

皆、やれやれという顔で座卓前に座る。

千代のみ、ただならぬ様子に警戒してか無言。

真紀 濡れへんかった、千代さん。

美香 大丈夫。空き部屋に入り込んでただけやから。それ

より智子さんが、

真紀、びしょ濡れになった智子を見て驚く。

真紀 智ちゃん、カッパ着てたん違うん。何それ、タオル

で拭かんと風邪ひくわ。

真紀、バタバタと部屋を移動。和室からタオルと

着替えを持って戻ってくる。

真紀 着替え、このスエット使ってくれてええから。

智子 ごめんな。真紀ちゃん、迷惑かけて。

真紀 こんな時に、そんなんええよ。

美香 あの、「見つかりました」の連絡は？

智子 まだ。

真紀 先しといた方が。

智子 そうやね、すぐ掛ける。

智子、上手に去る。

千代、ぎゅっと口を噤んでいる。

真紀、緊張した様子の千代に話しかける。

真紀 ごめん、千代さん。一人にしてもて。

千代 ……。

真紀 何か言うてよ、いつもみたいに。

千代、膝に置いた手を開いたり、握りしめたり。

おどおどした様子で、話し始める。

千代 あのお、うちの子、どこに行ってしまいましたんや

ろ。

真紀 智ちゃん？

千代 ええ、ええ。智子言いますねん。もう夜やのに、遊

びに行ったまんま、ぜんぜん帰って来ませんねん。

美香 智子さんやったらすぐそこ、

真紀、手を前に出し、無言で美香の言葉を遮る。

真紀 どんな服装してましたか？

千代 下はジープ。上は、ピンクのトレーナー。

智子、戻る。

真紀、智子に目で合図を送る。

智子、無言のまま千代と真紀の会話を見守る。

真紀 他に、持ち物とか？

千代 ポシエット。中に写真が。裏に「桜田智子」って、

名前書いてます。

真紀 智ちゃんのことなら、私、知ってます。

千代の表情が一気に緩む。

千代 え。ほんまに？

真紀 会長から伝言頼まれてたんです。家に泊める言うて
はりました。

千代 じゃあ、あの子は。

真紀 無事です。さっきまでここに。

千代 無事。あー良かった、それ聞いて私、ほっとしまし
た。

間。

千代 あなたは？

千代の異変を確信した真紀、智子、美香、チラチ
ラ視線を交わす。

真紀 望月です。会長の助手です。

千代 へえ。あなたも望月さん？

真紀 親戚なんです。

千代 あらー、そう。厳しくない？ 会長さん。カメラのこ

ととなつたらあの人、

真紀 ええ、まあ。

間。

会話はまた振り出しに。

千代、キヨロキヨロと視線を泳がす。

千代 あれ？ 智子、どこ行つたんやろ。

真紀 会長と一緒に、

千代 どこへ？

真紀 さあ、そのうち帰って来はるでしょう。

千代 そやね。一緒なんやったら安心やわ。会長さん、そ

んならそうと私に直接、言うてくれたらええのにね。

真紀 忙しかったんやと思います。

千代 そやね。会長さんは、自治会やら、何やらで忙しい
から。

真紀 とにかく智子さんは、無事なんで。

千代 無事。あー良かった、それ聞いて私、ほっとしまし
た。

千代、長い溜息。そして、欠伸。

真紀 お疲れでしょう。良かったらそつちの部屋でちよっ

と横になられては。

千代 でも。

真紀 大丈夫、戻ってきたらすぐ、声掛けますから。

千代 そうですかあ。じゃ、お言葉に甘えて。

真紀、千代を促し、和室へ。

千代を休ませ、再び座卓前に戻ってくる。

残された三人、しばし無言。

美香 （智子に）よかったですよねー。無事に千代さん見

つかって。

真紀 ほんま。

智子、頷くものの、複雑な表情。

真紀 （智子に）ポシエットって？

智子 私のお気に入り。ずっと持ってたやつ。

真紀 そんなん持ってた？

智子 え、知らん？

真紀、うなづく。

智子 そっか、真紀ちゃんがここ（団地）来る前か。

美香 何入れてたんです？

智子 ハンカチ、ティッシュ、家の鍵。うち鍵っ子やったから。

真紀 写真って？

智子 家族写真。お父さんとお母さんとノブ兄と私の。

真紀 へえ。

智子 「万が一のことがあっても、これがあれば証明になるから」って、お母さんが。

美香 万が一って？

智子 はぐれるとか、亡くなるとか？

美香 そんなあ。

智子 何とも言えん話やろ、家族やった証が、薄紙一枚って。

智子、うなづく。

真紀、吐き出すように。

真紀 しんどいな。生よりも死の方に焦点が当たってる場所は。

美香 え。

智子 だから、行きたくなくなったん？ 被災地。

真紀 「行きたくない」言うより、「行く資格があるんか」って話。そこで暮らしてきた人の大事な場所を、土足で踏み

みにじるようなことしてええんかって。

美香 踏みならんでいい方法はないん？

真紀 難しいわ、その質問。

美香 何で？

真紀 被災現場に通ってた頃な、

智子 うん。

真紀 被災者の気持ちに寄り添いたいって思って志願したはずなのに、回を重ねるにつれて、キツイ、しんどいって感覚の方が勝ってきて、

智子 うん。

真紀 細かいことに囚われてたらやっつけていけんような気持ちにもなって、

智子 まあな。

真紀 締切やのに紙面が埋まらん、載せるネタなんか何にもなくてスツカスカの時、「あー、こらで一発なんか大きな事件起きへんかなあ」って。冗談なんか本気なんかわからん誰かの呟き聞いて、嫌やなあって思うのは一瞬で。ざわつくでもなく、文句言うでもなく、何とのおそれを受け入れてもて、記事出して「やれやれ」日付替わって「困った、またマス埋めなあかん」って。

間。

真紀 泣いてる写真、叫んでる写真、人の不幸を掻き集めては、継ぎはぎして紙面を埋める。その繰り返し。

間。

美香 ええ話かて、あると違うん？

真紀 あるよ。けど、反響あるんはそっちやないから。

美香 ああ。

真紀（美香に）この前、震災の時の記憶について話したやん。

美香 うん。

真紀 あれ、続きがあるねん。

美香 続き？

真紀 撮られてたんよな、あん時。ひしゃげた家ごと、うち。

智子 どういうこと？

真紀 家の下敷きになって、目閉じて動かんようになった親の顔、冷たくて、血の気がなくて、蠟人形みたいで。うち、怖わなって思わず泣いてもた。一人やったけど、寂しいとかは思わなかった。ただ、どうしていいかわからなくて、ずっとずっと泣いてて。しばらくして、足音が聞こえてきた。

ザッザッザッと足音。

真紀 遠くの方から近づいてきて、止まって、声が出た。

美香 声？

智子 誰？

真紀 振り向いたら、黒い服着た男の人が真後ろに立ってて、「おい」って。

真紀、両手を使って幅を示し、

真紀 至近距離やのに、こーんな長さのカメラ構えてて、

美香 それって取材？ 新聞、それとも週刊誌？

真紀、首を振り、「わからない」と意思表示。

真紀 カモヤんか、うち。群れから逸れた野生動物の仔みたいに、震災遺族枠を埋める一人として完全に狙われてもうてたわけやん、そいつに。

美香 それで？

真紀 嫌や思っつて、咄嗟に後ろ向いて顔隠した。

美香 かしこ。
真紀 そしたら、「おい」って、「こっち向いて泣けや」って。

美香 それで、どうしたん？

真紀 どないも。「こらあ、見せもんちやうぞ」って。聡じいが来てくれて、怒鳴って終わり。振り返った時にはもう誰もおらんかった。

美香 腹立つ。何やねん、そいつ。

間。

真紀 あの時からやねんな。

美香 え。

真紀 嫌すぎて、思い出したくなくて、ずっとなかったことになってきたけど。あの中から、うちの心の奥底にずんと大きなしこりが残ってて、時々そいつが悪さして、その度に痛いなって、耐えられへんなって。

美香 痛いって、どんな風に？

真紀 生理ん時にくる重苦しい鈍痛、みたいな。

美香 真紀ちゃん、その例え、もひとつピンと見えへんわ。そんな一回もなかったことないし、ほら、私、軽めやから、

智子 そういう話とちやうやんか。

美香、舌を出す。

真紀 痛い。悲しいやないねん。でも、ふいにやって来る鈍いあれは、確実にうちの体と心を蝕んでいきよる、場

合によっては動けんようになることもある。その度に、何でこんな弱つちい身体に生まれなあかんかったんやろって。

智子 確かに。辛いな、あれは。

美香 結局、そっちの話やし。

智子 どうするん？ 痛みでしたら。

真紀 痛すぎて動けん時はじつとするしかないねんけど、マシな時は自己暗示で何とか。

智子 自己暗示？

真紀 辛い思ったらどこまでも辛い、だから極力無視しようって、女の部分。

美香 どうやって？

智子 苛酷な現場に行っても、ひるまず、泣かず、平気そうにふるまう。「だから女は」とか絶対誰にも言わせへんし。

智子 気合いか。

真紀 そ、気合い。

美香 我慢できるん？ そんなん、

智子 してたよ、途中までは、

美香 途中って？

真紀 苛酷な現場ばっかり率先してまわって、それなりにできる」と評価されて特集記事担当させてもらえることになった。

美香 おお。

真紀 何回目かの訪問の時、奇跡的に助かったっていう女の子を見つけた。三世代で同居してた総勢十人の大家族。その中のたった一人の生き残り。幼稚園行くか行かへんかくらいの子、たまたま山近くの従妹ん家に遊びに行っ

てて、助かったんやって。

美香 そう。

真紀 ずっと海の方見てるんよな、その子。家族全員、波に持っていかれたみたいで。

美香 可哀想。

真紀 様子伺いながら、伯母さんに声掛けて、許可貰って、写真撮ったんやけど、後で画像確認して驚いた。悲しうにしてる顔は一枚もない。しっかりしてんなあ、この子って思った。

美香 凄いな。

真紀 海、瓦礫の山、その間にキツとこつちを睨んだ顔が挟まる。そんな写真ばかりが、ずっと続いて、

智子 うん。

真紀 後になってようやく、その理由に気づいた。

智子 何？

真紀 この子、あん時怒ってたんやって、怒らせたんは、うちなんやって。

沈黙。

真紀 その瞬間、ぶわっとひしゃげた家の前での記憶が蘇ってきて怖わなつた。うちはただ、自分が抱えてる痛みから逃れたくて、忘れたい一心で一生懸命やってきたつもりでいたけど、一緒やんって、あの男と。同じことやってるやんって。紙面埋めたいがために、浅ましいことしてもうてるやんって。

真紀、うつむく。

真紀 うち、知らん間に越えたらあかん堰越えてもうてた。

美香 真紀ちゃん。

真紀 ショックやった。まさか思った。自分がどういう人間か、ぜんぜんわからんようになった。

智子 ごめん、真紀ちゃん。

真紀 ……

智子 よう知りもせんと。

沈黙。

美香、重い空気を変えようと。

美香 真紀ちゃん。

真紀 ン。

美香 あの、えーつと、あのー。

美香 カメラマンになったのって、誰の影響なん？

真紀 聡じい。

智子 ああ、そうなんや。やっぱり。

真紀 ……

美香 他は？

真紀 それ、今、答えなあかんこと？

美香 できれば。

間。

真紀 千代さんかな。

美香 千代さん？

真紀 うん。私の背中押し係。何回も被写体にもなつても

ろたし。

美香 それやったら、私も。男の子から押搦られる度に庇
つてくれたし、「美香ちゃんは可愛いなあ」言うて褒めて
くれた。

真紀、智子を見る。

真紀 智ちゃんもやろ、「私ばかり怒られる」言うてたけ
ど、それだけ大事にされてたつてことやねんから。
智子 ……。

突然、千代、駆け込んでくる。

片手を振り上げ、一喝。

千代 こらあ。

呆気にとられる、真紀、美香、智子。

千代 （美香に）あんた、逃げ。

美香・真紀・智子 えっ。

千代 早よ、逃げて。

千代、立ち止まり、美香に向かって、

千代 大丈夫？

美香 え。

千代 卑怯やろ、女の子一人に寄ってたかって。（美香に）
気にしな、絶対に気にしたらあかんで、お顔の傷はあん

たのせいやない。泣かんと、堂々としたいらよろし。

美香 泣いてない、私。

千代 何かあったら私に言うておいで、そしたらさつきみ
たいに、こうして、

千代、手を振り上げ、

千代 「こらあ」言うて、叱つてあげるさかいに。
美香 千代さん、私、泣いてないよ、ほら。

千代、美香の顔を覗き込み、

千代 あ？

千代、一瞬怪訝そうな顔をするが、続けて、

千代 知らんからいうてなあ、人の痛みを勝手になかった
ことにしたらあかん。そんなことしてたら、回りまわつ
ていざれどこかで自分にしっぺ返しがかかるんやから。知
らん子にはちゃんんと教えてあげ、

真紀、やんわりと。

真紀 どないしたん千代さん、夢見たん？

千代 夢？ 夢て何？ 私はただこの子（美香）を助けた
らな思つて。慌てて（美香に）なー。

美香、千代に調子を合わせ、

美香 なー。

千代、美香の頭を撫で、懐に抱え込む。手を離す。
再び屈みこんで笑顔を向ける。

千代 笑ってみせて。

美香、千代の思いを汲み取り、精一杯愛想笑い。

千代 ああ、ええ顔。その顔やったら大丈夫。さ、お家へお帰り。お母さん待つてはるわ。

千代、手を振る。

美香 え、なんで？

美香、千代につられて手を振りながら、

美香 私、まだ、
千代、バイバイ。気いつけて。

真紀、悪ノリして、

真紀（美香に）千代さんが、バイバイやって。
美香 そんなあ、こんな土砂降り、帰りたないし、

間。

真紀（千代に）帰りたないみたいやで。

千代 ……。

真紀 おばちゃんには私から連絡しとくし、おらしてあげよ。超大型台風来てるらしいから。

千代、はつとする。

千代 しもた、傘。

真紀 傘？

千代 なあ、悪いけど傘貸して。

真紀 ええけど、何で？

千代 ノブ、傘持たせんまま行かせてもうた。

一同、困惑。

千代 どうしよう、あの子、困ってるはずやわ。早よ傘持って行ってあげんと。

真紀 こんな強風では、傘なんか。

千代、聞こえていない様子。
慌てて玄関方向へ。

智子 お母さん、あかん。今外出たら、危ない。

智子、立ちふさがる。

千代 どいて。

『皆の団地（カイノウチ）』

智子 どかへん。
千代 どいて。

智子 行かんでええよ、そんなん。
千代 お宅誰？ 何でそんなイケズ（意地悪の意）するんですか。止めてください、どいて、そこ。

智子、千代にしがみつく。

千代 ちよ、何で？

智子 何でも。

千代 なあ。

千代、真紀、美香に「助けて」と視線を送る。

千代 なあて。

真紀、美香、動かず。

それぞれ、困惑の表情。

千代、智子の手を振りほどこうとする。

駄目だとわかり、智子の手を思いつきりつねる。

智子 痛い、痛い、痛てててて……もう、いい加減にして。

智子、飛び退く。

千代 あつ。

はずみで千代、倒れ込む。
真紀、美香、同時に、

美香 千代さん。
真紀 智ちゃん。

千代、顔をしかめ、

千代 痛い。ノブ。

美香、千代に駆け寄り、

美香 大丈夫、千代さん。

智子、いきなり怒りが沸点に。

千代を見降ろしたまま、

智子 ほんまに。

間。

智子 何でなん？ 何でお母さんは、

美香 まあまあ、智子さん。千代さん、寝ぼけはったんで

すよ。それか、ちよっとした勘違い。

智子 世話してきたんは私やのに。

真紀 今、そんな話しても。

智子 今やから言うねん。

真紀 智ちゃん。

智子 勝手過ぎるねん、みんな。

間。

智子 お父さんも、ノブ兄いも、人のこと振り回すだけ振り回して、ええとこ取りしたまんま先逝ってしもて、

美香 智子さん。

智子 最初からそう、ずっとそう、私ばかり。進学の時も、就職の時も、家の都合で当たり前のように割り引かれて。

間。

智子 ノブ兄いが東京の私大に進学してお金掛かったから言うて、私は地元の短大しか選ばせてもらえなかった。

編集とか出版の道に進みたかったのに、「あんたは家から通うんやで」って、就職も地元企業の一般事務に限定された。

美香 女の子やからですかね。うちの親も、「心配やから」って、何かにつけて地元推しですよ。

智子 極端やねん、うちは。夫婦共々長男様々で、ノブ兄いには何も言わへんのに、私にはいちいち口煩くて、あーだこーだ。

真紀 わかるけど、今さらそんな。

智子 そうや、全部今さらの話や。けど、家族のせいではないことに制限かかったのは事実やねん、我慢して、我慢して一緒にあったんが現状やねん。そこまでして尽くしても、この人の頭ん中は未だに、いつまでたってもノ

ブ兄いのごとで一杯、私のことなんか何も。

真紀 偏りすぎ、ノブ兄いのごとだけ違うやん、さつきも、智ちゃんのごと心配してたとこやん。

智子 いいや。この人が見てるんは私やないよ。三十三(歳)の娘のごとなんか、眼中にない。

間。

智子 はっきり言つて足枷。私にとって、この人は。

美香、真紀、智子、千代を見る。

千代、ぽかんとした表情で座り込んでいる。

美香、千代を気遣い、手をとって部屋の隅に移動する。

真紀 大変かもしらんけど、前向きにいかんと。

智子 は、前向き？、こんな状態で、こんな大きなコブ付きの身でどうやって？ やりたい仕事には就かれへん、結婚相手も探されへん、この人中心に一日のスケジュール組み立てて、細切れの空き時間で出来るこというたらパチンコくらい、吸い込まれるように店入って、ほっとするわけでもなくそこに座って、知らん間に散財してもうて、後になつて溜息つくのがオチやねん。

真紀 知らんわ、そんな。智ちゃんが勝手に、現実逃避してるだけやろ。

智子 現実逃避？ そうかもな、でも、それで誰かに迷惑かけてるか？ 自分以外の人間を傷つけてるか？ 越えたらあかん堰を越えたいうあんに、そこまで言われる

筋合いないわ。
美香 ちよつともう、二人とも落ち着いて。

真紀、智子のイライラが伝染し、

真紀 贅沢やねん、智ちゃんは。

智子 どころが。

真紀 家族がおるってこと自体が。

智子 疎ましがられながら、憎しみ合いながらおつても？

真紀 ふん、大げさ。智ちゃんはただ、千代さんにかまつて欲しいだけやん。ノブ兄いみたいに「智子、智子」いうて愛されたいだけやん。

智子 そうや。愛されたいよ、普通に。ここにいる私のことを認めてもらいたいよ。その何があかんの？

真紀 こつちは、二四（歳）ですべて亡くしてるねん。父親、母親、聡じいにも名前すら呼んでもらわれへん。一人やねん、ずっと。違和感持ちながら女として生きて、カメラの仕事だけでは食べられへんからバイトして、これからも一人で生きていかなあかんねん。

智子 他人扱いされるよりマシやんか、実の親から、「お宅誰？」言われるよりマシやんか、

美香 やめて、二人とも。千代さんが見てる。

千代、不思議そうな顔で二人のことを見詰めている。

智子 何でなんかなあ。

智子、うつむく。

智子 何かある度、報われへんって思ってた。報われたくてやってきたことちゃうのに、全部納得ずくで、覚悟して一緒におろうって決めたはずなのに、あかんなあ。あかん過ぎて何もかもが嫌になる。

間。

真紀 ごめん、智ちゃん。

智子、真紀に向かって無言のまま「いいや」と首を振り、「ごめん」と頭を下げる。

と、千代、立ち上がり、手を伸ばして後ろから黙って智子の頭を撫でる。続いて、真紀にも手を伸ばす。

真ん中に立ち、二人の頭を抱え込む。

千代 ごめんやでえ。

間。

千代 ほれ。

千代、二人の手を握り、繋がせ、その上に自分の手を重ねる。高らかに。

千代 仲直りの握手。姉妹仲良く。
真紀・智子・美香 え。

間。

千代 えーっと、あんたら、どこん家の子やったかいな？
真紀 千代さーん、そりゃないわ。

真紀、笑う。

美香もつられて笑う。

智子、目頭を押さえながら、

智子 あーあ、アホらし。ムキになったところで、変わらんもんは、なーんも変らん。

真紀 ほんま。

智子、真紀、お互いの顔を見詰める。

美香、パンパンと手を叩き、

美香 はい、えっと、あのー、すみません、皆さん何か喉渴きませんか？

美香、座卓の上を示し、

美香 ここにね、お茶とかお菓子とか置いてあったら素敵かなあって。

千代 お茶？

美香 わ、反応した。

智子 喉渴いたん？

千代、うなづく。

真紀 えーっと、千代さん何飲む？ 熱いお茶がいい？

それとも冷たいの？

千代 あったかいの。

真紀 わかった。淹れるわ。

真紀、その場を離れ、湯を沸かす。

千代と智子に向かって、

真紀 そっち、座って待ってて、

美香 千代さん、智子さん、こっち、こっち。

美香、手招きして千代と智子を座らせる。

真紀に近づき小声で、

美香 「ノブ兄いに傘」って、あの話、完全に飛んでもう

真紀 っ。

街燈の光が消える。

真紀 そうや、ええもん。

真紀、ケーキを出し、座卓の上に置く。

真紀 これ、バイト先の。ほんまはあかんけど、「勿体ないから」って。最近のコンビニ味ええねん。

美香 お茶会通り越して、お誕生日会。

智子 ほんま。

真紀 初めての誕生日会覚えてる？ 長瀬が欲張ってみんなのプリン食べて、お腹こわしてさあ、

美香 そうそう。

真紀、美香、笑う。

美香 真紀ちゃん、ロウソクある？

真紀 キャンドルやったらあるけど。

美香 やったー、点けよ、点けよ。

真紀、美香と一緒にお茶やらキャンドルの準備。何個か並べ、灯を点ける。

しばし手を止め、灯の向こう側の千代を見詰める。

真紀 ええよな、こういうの。

美香 ン？

真紀 どんな形であれ、見守ってくれてる人がいるって嬉しいことなんやなって。

美香 これからも。ねー、千代さん。

千代、にこにこ笑っている。

智子、黙ったまま、千代の手をさすり続ける。

間。

美香 ねえ、電気消さんと、灯目立たへん。

真紀 ええやん、そこまでせんでも、ほんまもんのお誕生日会やないねんし。

美香 なーっ、せっかくやのに何で？ 中途半端やん。

停電。

一同 あ。

智子 停電？

美香 やったー、キャンドル点けてて正解。マジでお誕生日会ぼくなってきた。

智子 一番近いんは真紀ちゃん、今週末やろ。

千代、大声で歌い始める。

千代 へハッピーバースデー、トウ、ユー、

智子（千代に）なあ、お母さんわかってる？ これ、真紀ちゃんの、

真紀 ええよ、別に。

千代・真紀 へハッピーバースデー、トウ、ユー、

美香 ええ感じ。でも、これってあかんパターンなんと違う？

智子・真紀、美香の言葉の意味に気づかないまま、

真紀・智子 へハッピーバースデー、ディア、千代さん。（智

子、真紀に）真紀ちゃん。

一同 へハッピーバースデー、トウ、ユー。

千代、ローソクの灯を吹き消す。

暗転。

一同 あ。
美香 やつぱり。

（エピソード）

二〇一八年四月。

再生工事了り目前の一五号棟。三〇二号室。

春。小鳥のさえずり。

ドアを叩く音。

真紀 はい。

玄関ドアが少し開く。

美香、開いた隙間から目だけ覗かせる。

と、ドアを全開にして、勢いよく飛び込んでくる。

真紀、ショートヘアの美香を見て驚く。

片手を上げ、はさみで切る真似。

真紀 えらいバツサリいってんな。

美香 そう、バツサリ。サトルのことも切ったった。

真紀 別れたん？

美香 うん。
真紀 うそ。

美香、思い切り、背伸び。

美香 うーっ、スッキリした。

真紀 髪まで、切って。

美香 とりあえず。気分変えたかったから。

美香、ウィッグを外し、

美香 しばらくは、これで。

真紀 なーんや、ウィッグ。

美香 三年がかりで伸ばした髪やで、そんな簡単に切れる

わけないやん。

真紀 男は切っても？

美香 髪は切らん。

真紀 何やそれ。

美香 もうちよつと柔軟に考えようかなって。

真紀 柔軟ねえ。

美香 とりあえず、私は思ってることサトルに伝えたから、

あとはサトルがどう判断するか。

真紀 なーんや、別れてへんやん。

美香 別れてもええって覚悟で言うた。

真紀 ほんまかいな。

美香 ウィッグ、便利。ほら、こうしたら傷も隠れるし、

真紀 ……

美香 アレンジきくし、とりあえず整形せんでもええかな

つて。

真紀 ごめん、いらんこと言うた。

美香 ううん。真紀ちゃんに言われて、そうか、別の選択肢もありなんや思ったら気い楽になった。

真紀 ……。

美香 なあ。

真紀 え。

美香 千代さん、どうしてはるやる？

真紀 元気みたいやで。グループホームの副会長してるつて。(自称)やけど。

真紀、美香、笑う。

美香 「副」ばっかし、何で？

真紀 さあ、基本気い遣いやから、千代さんは。主になり

過ぎるのは嫌なんちゃう。

美香 受け入れられてるん？ あっちの人に。

真紀 機嫌よう色んな人のお世話焼いてるつて。

美香 良かった。

真紀 「ほっとした」つて、智ちゃんも嬉しそうやった。

美香 智子さん、いつ引越してくるん？

真紀 「工事が終わり次第」つて言うてたけどわからん、

鍵預ける時に聞いとくわ。

美香 工事着工できたんや、パチンコにハマっててもちやんと。

真紀 まあな。本人自覚してへんみたいやけど、千代さん
によう似て生真面目なところあるから、羽目外した言うた
かて、うちらが考える程大きくは、

美香 そっか。

間。

美香 まあ、真紀ちゃん、

真紀 え。

美香 出発前に悪いけど、写真撮ってくれへん。「ちよつと
だけ、変わった記念」に。

真紀 ええけど、何、その記念。

真紀、美香、笑う。

真紀、カメラの準備。

部屋中、明るい光に満たされる。

美香 お天気になって良かったな。

真紀 うん。

美香 カザフスタンやって？

真紀 うん。今回は第一弾。準備出来次第、ウイグル自治

区やチベットにも行ってみるつもり。

美香 何撮るん？

真紀 境目。

美香 境目って、何の？

真紀 光と闇のかな。

美香 虹の出発点みたいなの？

真紀 地獄の出発点かも。

美香 ようわからんけど、観光やないつてことやんな。

真紀 まあな。

美香 大丈夫なん？

『皆の団地（カイノウチ）』

真紀 え。

美香 時間。

真紀 ああ、そっちな。

美香 そっちって？

真紀 いや。飛行機、夕方の便やから、まだまだ大丈夫。

バス停、そこやし。

美香 良かった。じゃあ、

美香、再びウィッグを被り、決めポーズ。

シャッター音。

真紀 ええわ、ミカリン。

美香 え。

真紀 ええ顔してる。

美香 真紀ちゃんもな。

美香、撮影後、上着のポケットから小さな包みを出し、真紀に手渡す。

美香 持って行って。

真紀 何？

美香 お守り。交通安全の。

真紀 今回は下見やで。すぐ帰るのに、わざわざ。

美香 ついでやし、気にせんといて。

真紀 ついで？

美香 縁結びの神様をお願いしてきた。良縁祈願。

真紀 え、もう？

美香 えへ。

真紀、美香、笑う。

美香 今度な、コスプレに挑戦してみよかなあって思てる

ねん。

真紀 え。

美香 ウィッグ楽しい。他にも可愛いの一杯あるし。

真紀 へーっ。

美香 もっと選択肢広げてみようかなって。

真紀 ……。

美香 真紀ちゃんも、冒険せな。可能性は無限大なんやからさ。

真紀 どういう方向性でよ。

真紀、美香、笑う。

美香、鞆から携帯電話を取り出す。

美香 あ、もうこんな時間。私、そろそろ。

真紀 ありがとう。ミカリン。

美香 バイバイ、真紀ちゃん。

美香、手を振りながら去ってゆく。

微かに響く工事の音。

変わりゆく団地。

汽笛が鳴る。

真紀、ベランダに出て外の景色を眺める。

眩い水平線を見て目を細め、微笑む。

真紀 あー。気持ちいい。

玄関ブザーの音。

ナオミ、間をおかず、自分でドアを開け入って来る。

ニット帽を深く被り、髪が見えない状態。養生のためのビニールを気にしながら、

ナオミ ここ、土足でも平気よね。

真紀、驚いて、

真紀 ナオミさん。

ナオミ 何、見たの？

真紀 海と、あと花壇。ほら、門の横。

真紀、向こう側を指さし、

真紀 チューリップ植えてて。

ナオミ へえ。
真紀 咲くにはまだちょっと早いんですけどね。

間。

ナオミ 良かったわ、出発までに会えて。

真紀 すみません。わざわざ。

ナオミ 工事。

真紀 ええ。
ナオミ 畳、無くなっちゃったわね。

真紀、苦笑。

ナオミ ま、いいわ。とりあえず行って、戻ってきて。

真紀 はい。

間。

真紀 あ、どうでした、写真集？

ナオミ 色っぽいって評判よ。真紀ちゃんに撮ってもらって正解だった。

真紀 ありがとうございます。

ナオミ あれ見た人から口説かれたりもしたのよ。「結婚を前提に交際を」って。うんと年上のおじ様から。

真紀 さすが。
ナオミ あんな直球久しぶり。びっくりしたけど、悪い気はしなかった。

真紀、笑う。

ナオミ、一瞬うつむいて、

ナオミ ねえ、頑張ったと思わない？ 私。

真紀 え。

ナオミ この身削って、新たなファンを獲得（ガッツポーズ）

真紀、ついついナオミの胸を意識し、

真紀 え、ああ。

ナオミ 今度は真紀ちゃんが頑張る番ね。私も引き続き頑張る、体調整えて、目指せ再建手術。

真紀 ……。

ナオミ 掴んでよね、真紀ちゃんは、本当に欲しいものを。

真紀 さあ、掴めるかどうか。本当に欲しいものって何なんかってところでにだいぶもたつてますから。

ナオミ、笑う。

ナオミ 大丈夫。それなりにいくわよ。

真紀 ですかね。

ナオミ 頑張つて。

真紀 はい。

ナオミ じゃあね。良い旅を。

真紀、丁寧におじぎする。

ナオミの姿をじつと目で追う。

ナオミ、去る。

自撮りの用意。タイマーをセット。点滅する光。

礼。前傾姿勢。空手の連続動作。最後に空を切るように大きく足を蹴り上げる。

シャッターの音。礼。

真紀 よし。

画像を確認し、機材をしまう、

歩く。立ち止まる。

部屋全体を見渡した後、暗室があった方向を見詰める。

真紀 じゃ、行ってくるわ。

玄関ドアを開ける。

射しこんでくる陽の光。

カメラとキャリーバックを引つ提げ、

真紀、再び前へ。

(了)